

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）

作品解説

第1章 光を湛^{たた}える



松島 巖《光を溜める》1999年 富山市ガラス美術館蔵

撮影：末正真礼生

1-1

松島 巖/MATSUSHIMA Iwao

《光を溜める》1999年

ガラス、コア技法

1946年岡山県生まれ、同地在住。

松島は大原美術館で出会った古代エジプトのガラス瓶に魅了され、1975年から独学で古代ガラス器の製法「コア技法」*の研究を開始しました。この技法は紀元前16世紀頃に発展し、前1世紀頃に途絶えたものです。松島は1980年にはこの技法について解明、その後講

演も行うなどして注目を集めました。本作《光を溜める》では、古代の技法に現代の創作性を融合させ、時空を超えた神秘的な美しさを表現しています。

*金属棒の先に耐火粘土でコア（芯）を作り、その上に溶かしたガラスを巻きつけ形を作る技法

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



山科 昌子《陽の流れ》2004年 富山市ガラス美術館蔵

1-2

山科 昌子/YAMASHINA Shoko

《陽の流れ》2004年

ガラス、キャスト、フュージング、サンドブラスト

1952年京都府生まれ、同地在住。

山科は当初、ステンドグラスの制作を手がけていましたが、次第にガラスによる立体的な表現に魅了されるようになり、徐々にガラスを立ち上げ、1989年頃までには完全に作風を変化させました。本作《陽の流れ》は、透明なガラスとマットな質感の鑄造ガラスを組み合わせしており、光を受けて開花したばかりの花の様子を想起させます。ガラスの反射による光のきらめきとやわらかさが作品を印象づけています。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



野田 由美子《Moon Light 月の光ー》1999年 富山市ガラス美術館蔵
撮影：室澤敏晴

1-3

野田 由美子／NODA Yumiko

《むーんらいとMoon Light 月の光ー》1999年

ガラス、宙吹き、カット、フュージング

1956年東京都生まれ、東京都新島村在住。

野田は、多摩美術大学卒業後、アメリカでの学びを経て、1988年に野田ガラス工房を設立しました。新島ガラスアートセンターのアソシエイト・ディレクターとして、日本の若手作家の育成にも貢献しています。彼女の作品は、自然豊かな新島で得た感動を基に、明瞭で多彩な色使いを特徴とする絵画的表現が魅力です。《Moon Light- 月の光 -》では、吹きガラスとサンドブラスト**を用い、月光や海の情景を繊細に描き出しています。

**高圧のエアで細かい砂をガラスに吹き付けて表面をマット調としたり浮彫などの彫刻を施す技法

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



扇田 克也《海に降る雨》2011年 富山市ガラス美術館蔵

撮影：末正真礼生

1-4

扇田 克也／OHGITA Katsuya

《海に降る雨》2011年

ガラス、色ガラスパウダー、コールド・キャスト

1957年大阪府生まれ、現在石川県と大阪府で制作活動を行う。

扇田は金沢美術工芸大学卒業後、東京ガラス工芸研究所でガラス制作を学び、1989年頃から鑄型にガラス片を詰めて熱を加え、冷却して固めるコールド・キャスト技法に移行しました。この手法により、柔らかな質感と光を生かした作品を制作し、国内外で高い評価を得ています。《海に降る雨》では、鑄造ガラスの形状や光の滞留が、静かに海面を打つ雨を表現し、詩情豊かな世界を作り上げています。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



小島 有香子 《Layers of Light -MOON- #5》2008年 富山市ガラス美術館蔵

1-5

小島 有香子／KOJIMA Yukako

《れいやーず おぶらいと むーんLayers of Light -MOON- #5》2008年

ガラス、積層、研磨

1979年石川県生まれ、富山県在住。

小島は、2001年に多摩美術大学を卒業後、富山ガラス造形研究所でガラス技術を学び、現在は富山を拠点に活動しています。作品は「月や沈む太陽」など自然の光にインスピレーションを受け、幾何学的な形態で表現しています。板ガラスを重ねて削り出すことで断面が模様として現れ、光を内部に留める工夫も特徴です。シンプルな形状ながら、作品は柔らかな印象を与えます。作家は光を造形として捉える独自の試みを続けています。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



ウラジミール・クライン《光の使者 I》1996年 富山市ガラス美術館蔵
撮影：末正真礼生

1-6

ウラジミール・クライン/Vladimír KLEIN

《光の使者 I》1996年

ガラス、カット、研磨、接着

1950年コマルノ（旧チェコスロバキア共和国）生まれ、ノヴィー・ボル（チェコ共和国）在住。

クラインは、チェコのガラス工芸学校と国立プラハ美術工芸大学で学び、スタニスラフ・リベンスキー教授に師事し、ガラス彫刻を習得しました。1977年からカメニツキー・シェノフのガラス工芸学校で教鞭を執り、1991年には富山ガラス造形研究所の初代海外客員教授として日本で技術指導を行いました。自身の作品では、光の反射や透過を生かした作品を多数制作しています。代表作《光の使者 I》は、鳥を思わせる形態で、光がもたらす視覚的効果を巧みに表現しています。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）

第2章 光を分解・再構築する



パヴェル・フラヴァ 《金色の蝶》1999年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：斎城卓

2-1

パヴェル・フラヴァ／Pavel HLAVA

《金色の蝶》1999年

ガラス、カット、接着、研磨

1924年セミリ（旧チェコスロバキア共和国）生まれ、2003年逝去。

フラヴァは、チェコのガラス工芸学校でガラスの切断や加飾技術、エングレーヴィング***を学び、国立プラハ美術工芸大学で彫刻とガラス芸術を修めました。1957年からはガラスデザイナーとして活動し、自然をテーマに作品を制作しています。本作《金色の蝶》は、透明なクリスタル・ガラスに金箔を挟み込み、蝶を幾何学的に表現した作品です。ガラス内部の金箔が繊細に輝き、自然の中で蝶が羽を休めている静かな情景が印象的に表現されています。

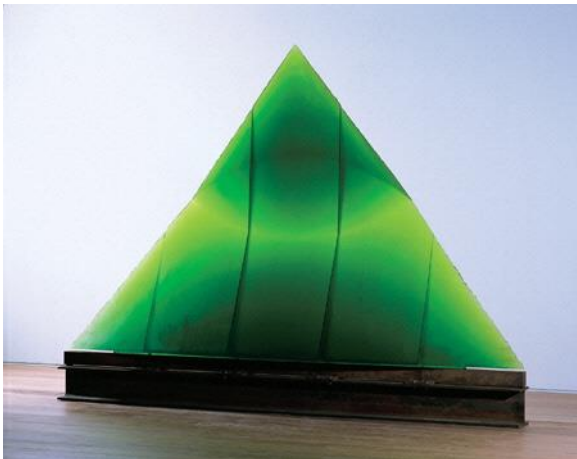
***ガラス表面に写実的な図像や文様を彫り加飾をする技法。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



スタニスラフ・リベンスキー&ヤロスラヴァ・ブリフトヴァー 《スペクトル》1996年
富山市ガラス美術館蔵 撮影：齋城卓



スタニスラフ・リベンスキー&ヤロスラヴァ・ブリフトヴァー 《ピラミッドの緑の眼》
1993-95年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：齋城卓

2-2, 2-3

スタニスラフ・リベンスキー&ヤロスラヴァ・ブリフトヴァー／

Stanislav LIBENSKÝ & Jaroslava BRYCHTOVÁ

スタニスラフ・リベンスキー

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）

1921年セゼミツェ（旧チェコスロバキア共和国）生まれ、2002年逝去。

ヤロスラヴァ・ブリフトヴァー

1924年ジェレズニー・ブロード（旧チェコスロバキア共和国）生まれ、2020年逝去。

《スペクトル》1996年

ガラス、キャスト

スタニスラフ・リベンスキーとヤロスラヴァ・ブリフトヴァーは、1954年から約45年にわたり共同制作を行いました。リベンスキーがデザインを描き、ブリフトヴァーが粘土で成形し、ガラスの鑄造技法で作品を完成させました。彼らは光やガラスの透明性を探求し、大阪万博の《生命の川》や、本作《スペクトル》などの作品を通じて、ガラス内にもう一つの空間を生み出す表現を追求しました。

《ピラミッドの緑の眼》1993-95年

ガラス、キャスト、カット、研磨

《ピラミッドの緑の眼》は、1990年代に制作されたリベンスキーとブリフトヴァーの「空間シリーズ」の一作です。円錐形とシリンダー形のガラスが融合し、接合部に「眼」を想起させる光の空間が生まれています。光を通すことで内部の構造が浮かび上がり、シンボリックなピラミッドの形と相まって神秘的な雰囲気醸し出しています。二人は「光の空間」をガラスで表現することに一貫して取り組みました。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



パヴェル・トルンカ 《スペクトルシリーズより》2006年 富山市ガラス美術館蔵

撮影：末正真礼生



パヴェル・トルンカ 《スペクトルシリーズより》2006年 富山市ガラス美術館蔵

撮影：末正真礼生

2-4, 2-5

パヴェル・トルンカ/Pavel TRNKA

《スペクトルシリーズより》2006年

ガラス、キルンワーク、カット、研磨

1948年ボジェブラディ（旧チェコスロバキア共和国）生まれ、プラハ（チェコ共和国）在住。

トルンカは、国立プラハ美術工芸大学でリベンスキー教授に学び、ガラス彫刻家として活躍しました。彼は幾何学的な形態とプリズムによる光の分解を融合させた「プリズム彫刻」の第一人者です。《スペクトルシリーズより》(2-4)では、ガラスが光を虹色に分解し、青や薄紅色の光が交じり合い、宇宙空間のような色彩を表現しています。幾何学の法則による形態と光学に由来する色彩は、トルンカの世界観を象徴しています。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



マリアン・カレル 《キューブ ウィズ ピラミッド》1992年 富山市ガラス美術館蔵
撮影：斎城卓

2-6

マリアン・カレル／Marian KAREL

《キューブ ウィズ ピラミッド》1992年

ガラス、キャスト、カット

1944年にパルドゥビツェ（旧チェコスロバキア共和国）生まれ、プラハ（チェコ共和国）で活動を行う。

カレルは、国立プラハ美術工芸大学でスタニスラフ・リベンスキー教授に学び、プリズムガラス彫刻の発展に貢献しました。彼は鉛ガラスを立方体やピラミッドなど幾何学的形態に切り出し、ガラス内部での光の反射や偏光を作品の重要な要素としました。《キューブ ウィズ ピラミッド（Cube with Pyramid）》は、黄色の四角錐と青色の立体を組み合わせ、内部に幻想的なピラミッド像を生み出した作品です。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）

第3章 光をとどめる



扇田 克也《HOUSE》2013年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：末正真礼生

3-1

扇田 克也／OHGITA Katsuya

《HOUSE》2013年

蛍光管リサイクルガラス、銅、コールド・キャスト

1957年大阪府生まれ、現在石川県と大阪府で制作活動を行う。

扇田は金沢美術工芸大学卒業後、東京ガラス工芸研究所でガラス制作を学び、1989年頃から鋳型にガラス片を詰めて熱を加え、冷却して固めるコールド・キャスト技法に移行しました。この手法により、柔らかな質感と光を生かした作品を制作し、国内外で高い評価を得ています。《HOUSE》は、ガラスで表現できることを探求する中で生まれ、かたちや技法を変えながら現在まで作り続けられているシリーズのうちの一つです。抽象化された形のなかに滞留する光が、静謐な時間の流れを感じさせます。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



渋谷 良治《海の神殿 '95- I》1995年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：室澤敏晴

3-2

渋谷 良治／SHIBUYA Ryoji

《海の神殿 '95- I》1995年

ガラス、研磨、キルンキャスト

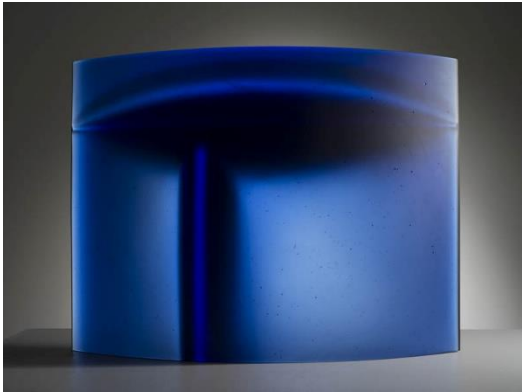
1956年埼玉県生まれ、富山県在住。

渋谷は多摩美術大学彫刻科を卒業後、ガラスの可能性を探求し、オランダでも学びました。

1990年から富山ガラス造形研究所で教鞭^{きょうべん}を執り、富山市ガラス美術館の初代館長も務めました。《海の神殿 '95- I》は、ガラスの透明性を生かし、外部と内部の空間を一体化させる作品です。気泡や光が内部に幻想的な世界を作り出し、異次元に通ずるかのような錯覚を引き起こします。本作は「ガラスは光と空間の芸術である」とする作家の思想を具現化した代表作です。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



張 慶南《壁・海の柱》2003年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：末正真礼生

3-3

張 慶南/JANG Kyung Nam

《壁・海の柱》2003年

ガラス、キャスト

1964年忠清南道(韓国)生まれ、岡山県在住。

張は韓国の弘益大学校で金属工芸を学び、ガラスに興味を持ったことがきっかけで、富山ガラス造形研究所と倉敷芸術科学大学大学院を修了しました。現在は教授として指導しながら、主にガラス铸造で制作を行っています。代表作《壁・海の柱》は、深海を思わせる青いガラスを用い、心理的・物理的な境界を象徴的に表現しています。光の透過によって変わる陰影が特徴で、鑑賞者の内省を誘います。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



アレナ・マチェイカ 《風車》2012年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：末正真礼生



アレナ・マチェイカ 《風車》2006年 富山市ガラス美術館蔵 撮影：末正真礼生

3-4

アレナ・マチェイカ／Alena MATĚJKA

《風車》2012年

ガラス、キャスト、研磨

3-5

アレナ・マチェイカ／Alena MATĚJKA

《風車》2006年

アラバスター、彫刻

1966年インドルジフーフ・フラデツ生まれ、ベトレム（チェコ共和国）在住。

マチェイカは、チェコのガラス工芸学校を卒業後、国立プラハ美術工芸大学でウラジミール・コベツキー教授に師事し、自由な芸術表現を学びました。古代神話や文学から着想を得た作品が多く、ガラスと石を組み合わせた独特のスタイルが特徴です。《風車》では、アラバスターとガラスで連続模様を制作し、ガラスの半透明性を活かして幻想的な空間を作り出しています。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



吉本 由美子《空中の楼閣》1997年 富山市ガラス美術館蔵
撮影：末正真礼生

3-6

吉本 由美子／YOSHIMOTO Yumiko

《空中の楼閣》1997年

ホウケイ酸ガラス、光学ガラスカレット、バーナーワーク

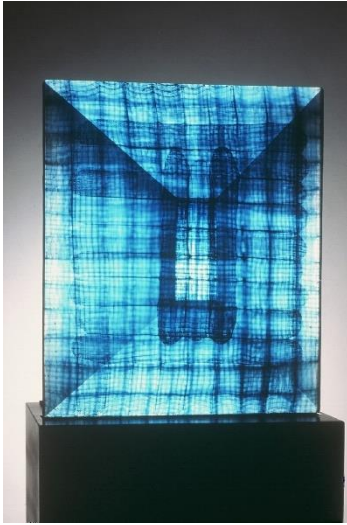
1944年宮城県生まれ、東京都在住。

吉本は女子美術大学卒業後、工業デザイナーのアシスタントを経て、ガラスに興味を持ち、バーナーワーク技法を習得しました。1978年には日本クラフトコンペ・京都展で資生堂賞を受賞し、バーナーワーク****が広く認知されるようになりました。バーナーワークは、ガラス棒をガスバーナーで溶かし成形する技法で、吉本はこれを使って小さなユニットを繋ぎ、大型作品を制作しています。代表作《空中の楼閣》は、無数のガラス棒を繋ぎ建築物を表現し、夢と現実が交錯するかのような感覚を生み出しています。

****ガラス棒やガラス管を卓上のガスバーナーで溶かしながら加工・成形する技法。ランプワーク、フレームワークとも呼ばれます。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）



塚田 美登里《Route》2002年 富山市ガラス美術館蔵

3-7

塚田 美登里／TSUKADA Midori

《Route》2002年

ガラス、キルンワーク、金属箔

1972年岐阜県生まれ、富山県在住。

塚田は国立高岡短期大学（現・富山大学芸術文化学部）で金属工芸を学び、富山ガラス造形研究所を経て、ガラス制作の道に進みました。塚田の作品は、金属とガラスを融合させ、複雑な色彩と奥行きを表現する独自のスタイルが特徴です。《Route》は、透明な青色の四角錐のガラス内部に、銅箔でつけた網目模様が広がり、物事の奥行きや内面を象徴しています。この作品は「第1回現代ガラス大賞展・富山2002」で奨励賞を受賞し、塚田のデビュー作となりました。

コレクション展 光の「うつわ」

主催：富山市ガラス美術館 会期：2024.12.7（土）-2025.6.1（日）

【参考展示（3-6）】

このコーナーでは、本展出品作家で、バーナーワークで日本のガラスアートをけん引した吉本由美子の制作について資料を交えて紹介します。

「日本クラフトコンペ・京都」は、「第8回世界クラフト会議」（会期：1978年9月11～15日、会場：国立京都国際会議場ほか）の協賛展として、同年に開かれた工芸の全国公募展で、多様な工芸が1000点以上出品されました。そのなかで吉本は、資生堂賞を受賞し注目されました。本展を契機に、吉本は本格的にバーナーワークに取り組み繊細でエレガントな作品を多数制作していくこととなります。

吉本の制作では、まず表現したいイメージを言葉で捉え、それをもとにデッサンを行い、形を具体的にした後、平面図をおこします。図をもとに、極細の炎が出るガスバーナーでガラス棒の先を溶かしつなげ、作品を組み上げていきます。その作品はしばしば、歴史や神話、物語で知られる建造物を想起させます。作家はこの一連の工程を、建築の歴史（記憶）やその構造をひも解き、ガラス造形として再度イメージを統合する作業であるとしています。